

## チリメンシラスに混入する“怪しい虫”

海洋科長 上田幸男

Key word ;ウオノ工, 富山市科学文化センター, 甲殻類, 加工

---

近年のシラスの加工は、全自動化され、漁獲したシラスを機械に入れれば、釜茹で、乾燥、選別までの作業工程をこなしてくれる。このため、一昔前のように天日干しや保存のために天候の心配は軽減されたようである。工程の最後は、ベルトコンベアから落ちたチリメンシラスを風圧で飛ばし、比重により、他魚やその他の混入物と選別し、さらに人の目によって不要なものを取り除き、良質の県産チリメンシラスが出来上がる。

平成 7 年にシラスの加工業者や県漁連から相次いで「販売したチリメンシラスにゴキブリやハサミムシが混入しているとのクレームが消費者からあり、困っている」との相談を受けた。ある業者に至っては取引停止になりかねない状況にあった。加工業者は混入した虫が陸起源のものでなく、海中に常在していることを知っていながらも、取引先に説明しても解ってもらえない状況にあった。査定の依頼を受けた私は、動物図鑑を開き、節足動物の等脚目フナムシ周辺を検索したが種は勿論、属や科の査定まで至らなかった。

当時、私は底びき網で漁獲されるエビの研究に専心していたことから、その繋がりを生かし、日本のエビ分類学の第一人者である水産大学校の林健一先生に相談した。先生のところにも過去に同様の相談があったらしく、その虫のことならと、富山市科学文化センターの布村昇氏を紹介して下さった。早速、標本を送付して早く同定していただいた。

査定結果は甲殻綱 Crustacea, 軟甲亜綱 Malacostraca, 等脚目 Isopoda, 有扇亜目 Flabellifera, ウオノ工科 Cymothoidae, *Mothoca* 属であった(写真 1~4)。



写真 1, 2 ウオノ工の一種 *Mothoca* sp. のホルマリン固定標本(平成 7 年 6 月 19 日橋湾沖, 採集, 全長 9mm)



写真 3, 4 ウオノ工の一種 *Mothoca* sp. の乾燥標本(平成 7 年 7 月, 海部郡内のスーパーで購入したチリメンに混入, 全長 15mm)

布村氏から、「お送りいただいた標本は、等脚目ウオノ工科のものです。この仲間の分類はまだ、混乱しており、属の分類も安定しておりませんが、Mothoca 属のものと思われます。いずれにしても、甲殻類ですから、エビやカニに近い仲間で、全く無害で人に寄生することはありません。また、この類の成体は魚類に懸着し、体液を吸いますが、幼生はシラスなどとともによく泳ぐので、これを除去するのは不可能に近いと思います」とのコメントを頂いた。

その旨を依頼者に伝えたところ、消費者や取引業者の不信感は速やかに解消した。

平成 11 年にも新たに同様の依頼があり、前回のものとは異なり、胴体が細いとのことであった。早速、標本を送付して同定していただいた。

査定結果は甲殻綱 Crustacea, 軟甲亜綱 Malacostraca, 等脚目 Isopoda, 有扇亜目 Flabellifera, ウオノ工科 Cymothoidae, Aegathoa であった(写真 5, 6)。



写真 5, 6 ウオノ工の一種 Aegathoa の乾燥標本  
(平成 10 年 12 月 20 日, 橘湾沖採集, 全長 9mm)

布村氏から、「私の知る限り、既知種と該当しません。しかし、Aegathoa 自体、他のウオノ工科の幼生とされています。宿主になる魚をさがすため、盛んに遊泳し、シラスと混獲されます。シラスに混じていることは珍しいことではなく、何度も同じ質問を受けました。食べるとシラスに混じているエビと同じ様な味がします」とのコメントを頂いた。

加工業者も二度目の経験であり、今回も容易に問題は解決した。

これらの出来事を振り返って考えてみた。布村氏は、なぜこのような人間活動や経済活動に全く関係ない動物に光を当てたのだろうか。博物学的な感覚であろうか、真理の探究であろうか。いずれにせよ、日本に布村氏という等脚目の研究者がいたことにより、日本の多くのシラス加工業者や漁業者、そして消費者が救われたことは紛れもない事実である。

水産学研究者(私も含めて)や水産行政担当者の中でマイナーな生物の研究を「そのようなテーマの研究をやって何の意味がある」と偏見の眼で見がちだが、どのような研究が、生業である水産業に役立ち貢献できるかどうかは明らかでない。水産業における大きな課題を研究テーマに取り組んでいたとしても目の目を見ない研究も多いし、真理だと認識されていたものが新たな技術の開発や社会構造の変化に伴い、形骸化することもある。

また、今回の出来事を通じてこれからの研究調査及び県民サービスには情報や研究者間の繋がりが不可欠であることを再認識させられた。1 人でできる研究は限られており、自分ができなくても情報力や研究者の繋がりで対応できるのである。そのためにも情報を拝受するばかりでなく、「このことは A 氏に聞けば解る」と言われるように、自らも水産業や海に関する専門的な技術や知識の一翼を担う必要がある。そうすることにより、さらなる新たな繋がりが生まれるであろう。

チリメンに混入する“怪しい虫”を通じて筆者が思ったことである。

